ラピッド・メモリー

サフィール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラピッド・メモリー

【Ｎコード】
Ｎ８８８５Ｑ

【作者名】
サフィール

【あらすじ】
俺は日高颯真（ひだかそおま）中学を卒業したばっかである。
ここ数年前に、ある科学者が開発したものがきっかけで俺の人生は、１８０度回転してしまった・・・

私立〇〇学園始業式

「夏希そのままいけ！」
「オッケー、まかせといて！」
「二人ともがんばれー。」
♪～～ゲームクリアー～～♪
「ふぅ～」
「やったー。いぇーい♪」
ぱしぃぃぃ
「二人ともおつかれ～。」
俺は日高颯真（ひだか　そおま）そして
「颯真～のど乾いたぞっ！」
「もう・・・夏希（なつき）、颯真君にたよらない」
この天真爛漫なのが日乃本　夏希（ひのもと　なつき）
もう片方のおしとやかなのが日乃本　陽菜（ひのもと　ひな）
二人は姉妹なのである。
「陽菜いいよ、いってくる」
「さっすが颯真わかってるじゃん」
「二人とも何がいい？」
「オレンジジュースおねがい！」
「私もそれがいいかな」
「はいよ、じゃあ行ってくる」
俺は少し離れたところへ行った。

「えっと、二人の分は買ったし俺は何にするか・・・あっ」
お金を落としてしまった。そこに・・・
「はい、これ。」
ドクンーーーーー

「あ・・・ありがとうございます」
「（あれ？なんだこれ？）」
「どうしたの？私の顔になにかついているの？」
「（まさか見とれてましたなんて言えないよな・・・）」
「そんなことはないです」
「そう？またね。え・ええとー」
「そうまです。ひだかそおま」
「そっか。またね、そおま君♪」
「はい・・・」
しばらくして俺は二人の元へ戻った。

そこには少しカリカリしている夏希と心配そうな顔の陽菜がいた。

私立〇〇学園始業式（後書き）

初めて投稿しました。
できがあるいと思うのでアドバイスお願いします。

私立〇〇学園始業式2

「遅い、いったいなにしてたの！」
おいおい、買わせておいて最初の一言がそれかよ・・・
「まぁまぁ夏希ー、せっかく颯真君が買ってきてくれたんだからさ」
「いいよ、陽菜。少しボーっとしていたから遅くなったんだから」
「ほーら、陽菜もさっさと飲んで帰ろう♪」

「そろそろ帰るか？」
「「うん」」

俺たちは、電車に乗り、家に帰った。
電車の途中、高校になったらどうする？とかの話をした。
プシューーーーーーーーーー
どうやら着いたみたいだ。
「二人とも行くぞー」
ガッ
「危ない！」

「大丈夫か？陽菜」
「うん、大丈夫だよ」
んっ？陽菜の顔が赤い。熱でもあるのか？
「その・・・ね」
「どうした？」

「離れてくれないと・・・」
「あっ・・ああ、ごめん！」
俺は、あわてて陽菜からはなれた。
「何してんだか二人とも」
あきれ顔で夏希がいってきた。
「陽菜、颯真いくよー」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今はもうみんな寝てしまっているはずなのに・・・
なんで俺の上に陽菜がいるんだ？
今は真夜中の時間帯くらいだ。
夏希と陽菜は、わけあって俺たちは一緒に暮らしているわけだが・・・
「え・・・えぇーーとーーー・・・」
ピトっ
陽菜が指を俺の口に当ててきて
「颯真君、静かにして。夏希が起きちゃう」
コクリ
うなずくと陽菜はどいてくれた。
小声で陽菜に聞いてみた。
「なんでここにいるの？」
「・・・・・・」
なんでだまってるんですか？その沈黙が俺を混乱させる。
「その・・・ね。今日はありがとう」
「へっ？」
思わず俺はマヌケな声をだしてしまった。
「それだけか？礼なんていいのに」
「ううん、とっさに助けてくれなかったら危なかったよ」
「だから、お礼がしたいいんだけど。ちょっと目をつぶって」

「こ・・・こうか？」
「うん・・そのまま」
チュ・・・
「んっ！？」
目をあけると陽菜の顔が正面にあった。
陽菜も恥ずかしくなったのだろうか俺かはなれると少し距離をとっている。
顔は真っ赤になりしたをむいている。
しばらく沈黙が続く・・・

こんこん
「颯真、まだ起きてる？」
「「！？」」
「陽菜、早く俺の布団の中に！」
陽菜に手を伸ばした。
「ど・どうした？」
ガチャ
「え・・えとね」
「今日は陽菜を助けてくれてありがとう」
「どういたしまして？」
「それじゃ、おやすみ」
「お・・・おう、おやすみ」
バタン

私立〇〇学園始業式３

「いった？」
「あぁ」
（なんでだろう？ドキドキがとまらないよ・・・顔あかくなってないよね／／／）
「私もいくね、おやすみ♪」
「あぁ、また明日な～」
（陽菜ってあんなに可愛かったっけ？）
俺はそんなことを考えつつ夜の眠りについた。

ピピピピピピ・・・・・♪
日乃本陽菜の朝は早い。
今は、朝の５時。
「んっ」
（昨日、私・・・キス・・・したんだよね？）
「朝ごはん何にしようかな？」
冷蔵庫の食材は、食パン、レタス、卵、トマト・・・である。
「朝はご飯があるからお弁当はサンドイッチでいいかな？」
トントントン・・・
「陽菜～おはよ～」
「おはよー夏希」
今は６時３７分
（そろそろ颯真を起こしにいこうかな）

ガチャ
颯真の部屋に入ると当然のことながら颯真はまだ眠っていた。

「颯真君、颯真君、起きて」
「んっ～～あと5分」
「起きないと朝ごはん全部夏希が食べちゃうよ？」
ガバッ
「おはよー颯真君」
「おはよ～ひな～」
俺は、ベッドから立ち上がりリビングへ行こうとした。
グラッ
「うぉ！？」
「きゃ！？」
「「・・・・・・」」
立ちくらみがした俺は、一緒に陽菜まで倒してしまったみたいだ。
体制的に俺が陽菜に押し倒されている感じだ。
無言の沈黙が立ち込める・・・
その沈黙をやぶったのが
「うるさいよ二人ともー、何してんのー？」
夏希であった。
ダダっダダっダッダ
階段を夏希が上ってきて

「何してんの？二人ともこんな朝っぱらから？」
「えっ！？いや・・・その・・・」
「ふぅ～ん、まぁいいや。はやく食べないと遅刻しちゃうよ？」
「あっ、ホントだ！急がないと」
ただいま7時２３分。遅刻まであと５２分

「よし、いくぞ夏希」
俺と陽菜は昨日のうちに用意ができていたので余裕があった。

「まってよー、二人とも〜」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8885q/

ラピッド・メモリー

2011年10月8日14時54分発行